

織物体験事業

～ 聞いて、見て、製作して 伝統の桐生織に触れる体験活動 ～

学校教育課 教育支援室

1 はじめに

桐生市の小学生は、3・4年の社会科において、社会科副読本『わたしたちの桐生』を使って、桐生市の伝統産業である桐生織の工程や工夫、歴史について学習している。本事業では、これらの学習内容について体験活動を通して理解を深めさせるとともに、桐生織の美しさや優れた点、郷土桐生の伝統について実感させることをねらいとしている。加えて、中学校（特別支援学級）と特別支援学校の生徒については、一人一人が持つ能力や可能性を最大限に伸ばし、自立や社会参加をするための「力＝生きる力」を育成することをねらいとしている。

本事業には子ども議会における提案が生かされており、「郷土桐生を愛する心を持った子供」の思いを具現化し、その思いを他の子どもに広げ引き継いでいく事業であると言える。

2 概要

(1)対象

小学校3年生以上を対象とし、平成27年度は26校のべ924人〔小学校17校830人、中学校（特別支援学級）8校のべ74人、特別支援学校中学部1校のべ20人〕が参加した。

(2)内容

外部講師を招聘し、各学校の体育館にて伝統工芸品の特性や技法、原材料に関する講習と製作体験を行った。小学校については「桐生織物協同組合伝産委員会 桐生織伝統工芸士会」、中学校（特別支援学級）と特別支援学校については「絹遊塾 工房 風花」の富岡製糸場世界遺産伝道師協会伝道師を講師として招聘した。中学校（特別支援学級）の生徒は、工房の見学と工房での体験も行った。

(3)実施時間と回数

2単位時間を1回として、小学校は各校1回、中学校（特別支援学級）と特別支援学校は各校2回実施した。

3 活動の様子

(1)桐生織の説明

古代から近世、近代にかけて、1300年の桐生織の歴史を学んだ。徳川家康が関ヶ原の戦いで使用した旗に桐生織が使われていた話を聞き、目を輝かせる児童がいた。また、着物一着に4000個もの繭が使われることや数々の工程を経て製作されることを聞き、その価値の高さに改めて感心する児童も見られた。

(2)織物の観察

始めに経錦織や緯錦織など、技法の異なる7種類の織物について説明を受けた。次に、模型で織り目の仕組みを確



【桐生織の歴史について話を聞く】



【ルーペを使って織り目を観察する】

かめた後、ルーペを使って実物を詳しく観察した。着物や帯に実際に触れ、技法の違いにより色や模様、光沢、手触りが変わることを実感していた。自分の着ている洋服の織り目に目を向け、織物との違いを比べる児童もあり、自分から興味を持って調べようとする姿が見られた。

(3)機結び

糸が切れてしまったときなどに糸を結ぶ「機結び」を体験した。体験では練習用の太い糸を使用した。なかなか結べず、悪戦苦闘する児童がたくさんいた。職人の技術の高さを肌で感じることができた。自分から講師に質問をしたり、できるようになった友だちに教えてもらったりと積極的に人にかかわる姿が多く見られた。



【講師を囲んで機結びの体験を行う】

(4)製作体験

小学生はグループに分かれ、高機織機を使って正絹タペストリー製作を行った。開口・緯入・おさ打の3つの工程を体験し、交代しながら50cm程のタペストリーを製作した。順番を待つ間にも、糸一本一本が織物に変わっていく様子を真剣に観察する様子が見られた。

中学校（特別支援学級）・特別支援学校の生徒は、回転整経式手織機「フラミンゴ」という手織機を使ってストールを製作した。特別支援学校の体験では2日目にストールが完成した。自分が織ったストールを首に巻く生徒たちの表情からは、達成感や成就感が感じられた。



【小学校児童による製作体験】 【中学校（特別支援学級）・特別支援学校中学部生徒による製作体験】

4 おわりに

体験後の児童生徒の感想からは「織物の歴史や作り方、昔の桐生がどのようなところだったのか、詳しく教えてもらえて勉強になった」というように、社会科で学習した内容について実感を持って理解した様子を見取ることができた。また、「桐生織は1300年も伝統があって貴重なものと思った」「一生懸命に織物を作っている人がいるとわかって、ありがたいなと思った」「大きくなったら機織りの仕事がしたい」という感想からは、子どもなりに桐生織の伝統を実感し後世に引き継いでいきたいと考える様子を見取ることができ、本事業でのねらいは達成されたと捉えている。そして何よりも、児童生徒が「本当に織物が作れるんだ」という驚きを感じ、物作りの楽しさや喜びを味わいながら、「もっとやってみたい」と主体的に取り組むことができたのが、一番大きな成果であると感じている。

今後も、子どもたちが桐生の様々な事象・事物のよさや素晴らしさに触れ、知的好奇心を持って主体的に取り組むことができるような事業を工夫していきたいと考える。